



全労連青年部ニュース

YOUTH TOPIC

つながる・たたかう・支えあう青年部を



ホームページ<http://www.zenroren.gr.jp/jp/seinen/>

ブログ<http://blogs.yahoo.co.jp/zenrourenpower>

無言館と松代大本営、満蒙開拓の証言>>>>

戦争の惨状、愚かさを実感した2日間

ユニオンユースアカデミー2015in長野に全国から47人が参加



全労連青年部は5月30～31日、毎年恒例のユニオンユースアカデミーを開催しました。全国各地から47人が参加。快晴と天候に恵まれたなか、長野県で無言館と松代大本営を見学、満蒙開拓の証言、交流会などを行いました。「戦争する国づくり」が国会で焦点となる情勢のもと、第二次世界大戦

の悲惨な実相と犠牲者一人ひとりに迫り、参加者は「二度と戦争はしない、加わらない」との思いを新たにしました。

戦没画学生の遺作に向き合う

一行はまず、無言館を訪れました。無言館は上田市にある美術館で、戦没画学生たちの遺作となった絵画・作品・絵道具、戦地から家族にあてた手紙などを専門に収蔵展示しています。道中まではおしゃべりしたり、にぎやかだった一行ですが、芸術の才能を花開かせる前に戦争で亡くなった画学生の作品を前に、真剣な面持ちで鑑賞しました。



新緑と穏やかな空気に包まれた無言館（左）、亡くなった画学生の氏名が刻まれた「記憶のパレット」（右）

半ば強制的に渡満、家や農地は中国人から奪ったものだった

加害と被害、両面を考えることが大切

満蒙開拓記念館副館長
寺沢秀文さん



満蒙開拓は中国からみればまぎれもない侵略だ。その現実を直視してもらいたい。開拓団員の人たちの苦難、涙、思いも語り継がれなくては行けないが、同時に加害と被害という両面を考えることが大切だ。私たちが運営している記念館は、たとえ不都合な真実であってもありのままを示している。例え国の行っていることであろうと、おかしいことには「おかしい」と思える感性を持つ賢い国民でないといけない。過去の史実に向き合い、その感性を育てることを記念館は目的にしている。

捕まるくらいなら死を選べ

元満蒙開拓団員
大石文彦さん



満州からの逃避行は悲惨なものだった。当時は、捕まるくらいなら死を選べという教育が徹底されていたため、多くの人が服毒自殺し、集団自決もあった。また、現地の中国人は日本人を恨んでいたため、日本人襲撃は後を絶たなかった。私と姉は母と一緒に徒歩で逃げて何とか生き延びることができた。途中で親切な中国人にかくまってもらえることができ、帰国までそこで生活した。幼い私は日本語を忘れていく。そこで、母が日本語の歌を歌ってくれた。8年後、ようやく帰国することができたが帰国してからも苦難が絶えなかった。

その後、長野市内のホテルに移動し、満蒙開拓の歴史を学ぶ講演会を開催しました。講師は寺沢秀文さん（満蒙開拓記念館副館長）と大石文彦さん（元開拓団員）の2人です。

寺沢さんは満蒙開拓の歴史的経緯を説明。満蒙開拓は国策として進められ、27万人が渡りました。開拓団員が全国で一番多かったのが長野県です。背景には、国内の貧困を解決するための「人減らし」をしようとした国と、「満州国」を防衛したいという軍部の思惑の一致がありました。しかし開拓計画は順調には行かず、強制的な送り出しへと変化していきました。1945年8月9日、ソ連軍の満州侵攻後、いち早く撤退した日本軍の一方で、開拓団員は何も知らされず取り残されました。終戦後、日本政府は取り残された人たちを救出することをせず、「現地に留まって生きよ」との方針を打ち出し、開拓団員の苦難を長引かせることとなりました。

大石さんは、「非国民」といわれないようしぶしぶ家族とともに渡満したこと、ソ連軍の侵攻で集団自決まで起こった悲惨な逃避行、帰国後の苦難などを証言しました。満州到着後、山林原野を開墾するのだろうと思っていたのが、家も農地もすでにあり、「現地の中国人たちの家や農地を安い値段で買叩き、強制的に追い出した結果だ」と、戦争の当時のことを話しました。

国は本当に正しいのか常に疑問視して

参加者からは、「今まで学校で習ってきた歴史は一般常識的なもので試験のために学ばされていたよう

に思う。今まで知らなかった事実を聞いて、新たに自分の考えをつくることができた」という感想がありました。また、「この間の国会の審議を聴いていると戦前ではないかと思う。どう思いますか」という質問がありました。大石さんは、「国際的なことを考えれば、ある程度防衛を整えることは必要だ。しかし、国会やニュースなどに関心をもち、本当に正しいことなのかと常に疑問視し、軍隊が暴走しないように常に監視しないと行けない」と述べました。寺沢さんは「安倍さんがいう『誇りをもて』とかもっともだと思うが、問題は当時も同じだったこと。日本人が先頭になってアジアの平和をつくるという大東亜構想は結果として他の国々を犠牲にした。国策でもおかしいことはおかしいと感じられる感性を持つこと、そのために歴史から学ぶことが大事」と答えました。

松代大本営で行われていた奴隷労働



2日目は松代大本営跡と「御座所」予定地をガイドの説明を受けながら見学しました。本土決戦に備えて軍の総司令部や天皇を移す計画でつくられた広大なトンネルなどが残されています。

トンネル掘削作業はすべて人の手で行われ、3つの山に1万人が働かされていました。その多くが朝鮮から強制的に連れてこられた人たちです。奴隷のように働かされたたくさんの命が失われました。ダイナマイトをとりつけるなどの危険な作業をさせられ、爆発に巻き込まれたり、不発弾が採掘途中で爆発するようなこともありました。「こうりゃん」という家畜の餌にしかならないようなものを食べさせられ、消化に悪く重労働から体調を崩す人が多かったといいます。

完成までの時間稼ぎのために 沖縄、広島、長崎が犠牲に

「日本軍は本土決戦の準備、つまり松代大本営が完成するまでの時間かせぎのために沖縄を捨て石にし、地上戦で25万人も亡くなった。その半数以上が県民。それでも敗戦を認めず、原爆が広島、長崎に投下され、やっと降伏した。もし、日本が降伏しなければ沖縄と同じような悲劇が繰り返されたかもしれない」とのガイドの方の話に、参加者は真剣に耳を傾けていました。ガイドの方によると、松代大本営は戦後40年、何の保全もされていませんでした。しかし、長野県の高校生が沖縄戦について学び、「松代大本営を保存し、後世に伝えて欲しい」と長野県に要請した結果、保存が決まったとのことでした。

満蒙開拓団、松代大本営建設の経験から日本人は何を学ばいいのでしょうか。真実を知った者は次の人に伝えていく社会的責任があります。おかしいことにはおかしいとはっきりと声を発することが大切です。

写真上2つ：暗く冷たいトンネルを500mほど見学
下2つ：一部が松代地震測候所になっている「御座所」予定地

参加者の感想 (抜粋)

多くの意見があるなかで情報の選択は難しいですが、戦争に反対する意見だけはしっかりもっておきたいと思いました。

あるアジアの青年が「日本人は信用できない。かつて侵略したからではなく、歴史を知ろうとしないから」という言葉に衝撃を受けた。自分が歴史を知らずとも時間は過ぎていくし、学校で教えてくれないからといって、知らないことは愚かだと痛感した。

絵を描きたいと願う画学生たちの人権を踏みにじる戦争を改めて認識でき、個人的な趣味で絵を描くことが好きなのでより身近に感じる事ができた。

開拓のために移住した人々が現地の土地を奪うかたちになって良く思われていなかったということ、言われてはじめて気づいた。

今回通ったトンネルは人の犠牲の上にできた道だと思いたたまれなくなります。「人が人にやっていいことではない」この大本営跡地を見ても戦争は忌避すべきものです。

初めてユニアカに参加したが楽しかった。改めて戦争の恐ろしさも学べて良かった。

圧倒的劣勢のなか無謀な本土決戦を行うために、多くの朝鮮人や沖縄の人たち、原爆の被害者を出したことはとても悲しい。

絵という表現が好きで、それに打ち込んできた、ごく普通の青年たちの絵なのだ。だからこそ、ごく普通の人々が戦争に駆り出される恐怖、残酷さが滲み出ている。

